

1

a 統計

b 事態

c 器官

2

コミスベる

3 I 触覚 II 精神 スする

(完答)

(完答)

4

A な

B ぞ

C 身

5 イ

6 五感

スす た体験

(完答)

7

X イ

Y ウ

8 I・III

9 ノン

10 (記述題)

(順不同・完答)

2

a

職場

b

難民

c

交

2

A

方

B

適

C

相

D

誠

3

エ

4

(記述題)

5

否定

6

(記述題)

7

もう

ス

しく

8

日本

ス

こと

(完答)

(完答)

9

給水塔

10

エ

1

10

言葉は世界と対応して、何で
も表せるものだ。と考えること。

(同意可)

2

4

元の国にいけない事情があり、危険を冒し
ても小さな船で脱出して他国に渡った人たち。

(同意可)

6

に	恥	え	く	幼
怒	じ	よ	連	い
り	る	う	れ	こ
や	と	も	ら	ろ
あ	と	な	れ	に
き	も	く	た	自
ら	に	、	ど	分
め	、	そ	り	の
を	な	の	着	意
感	じ	よ	い	思
じ	め	う	た	と
る	な	な	だ	は
か	い	自	け	関
ら	環	分	で	係
。	境	を	答	な

(同意可)

〔配点〕

1 1
10 1 4
2 2
4 1
6 2

各2点×13＝26点
各6点×3＝18点
各4点×14＝56点

- 1 ① a 「統計」は、特定の集団・集合について、分布・確率などを数量的にあきらかにすること。b 「事態」は字形に注意すること。とくに「能」などではないこと。c 「器官」は身体などの一部。同音異義語に注意することが肝要である。
- 2 「私たちの小さくない懸念事項」の内容を探すことになる。続く短歌とその説明をたどると、それらをまとめた箇所「どこまでコミュニケーション能力が学べるのか疑問が残るところです」とあり、「懸念事項」Ⅱ「疑問が残るところ」とすると、「(どこまで)コミュニケーション能力が学べるのか」というのが懸念の中身であることがわかる。
- 3 続く段落が具体的な内容だが、ここでは具体的すぎるので、さらに次の段落をみると、「つまり赤ちゃんにとって、触覚の体験は、そのまま味覚・嗅覚の体験にもつながります。」「身体感覚は発達の基本的な土台を形成するものであり」とある。「発達の基本」は「発達の基本的な土台」と考えれば、ここにもとづいて答えをイメージしていけばよい。
- 4 A「警鐘をならす」は、事態が悪い方向へ向かっていることを知らせること。B「神のみぞ知る」は、人間には知りようもないことを表す慣用表現。C「身もふたもない」は、言動などがあからさま過ぎて配慮に欠けるさま。「実」などではないこと。
- 5 「証左」は証拠のこと。傍線部を含む一文を読み、「何が希望か」と考えてさかのぼる。
- 6 希望がある反面、不安もあるということなので、直前をもとに考える。
- 7 Xは「抱きしめて確かめている子のかたち心は皮膚にあるという説」という短歌が何を言い当てているのか、Yは「イチゴという言葉知らねどこの赤くあまずっぱいものは好きになる」という短歌が何を言い当てているのか、と考えていく。いずれもまとめの箇所にあるので、意味段落を意識して読み進め、見出しをつける問題だと思えばよい。
- 8 「このように育った猫」とあるので、直前の段落の「縦縞しか見えない環境で育てると、その猫は横縞を知覚できなくなってしまう」というふうに育てられた猫ということである。
- 9 前々段落から話題が移り変わっており、「言語だけでは伝わらない情報も無視できない」ことについての話になっている。そのことをまとめた語句として「ノンバーバルコミュニケーション」が紹介されていた。
- 10 「俵さんが指摘している通り」なので、直前の引用部分にもとづいて考えればよいだろう。引用箇所の直前にも「私たちはことばで何でも表せると思ってしまうがちですが」とある。

- 2 ② a 「職場」の「職」は字形の細部もていねいに書いてほしい。b 「難民」は、紛争や迫害から自分や自分の家族の命を守るために、自分の国を離れて国外に逃れなければならなかった人のこと。c 「交ざって」については、「混」はもとの境界がなく溶けあうこと。「交」はもとの境界を保ったまま同居していること。
- 3 まもなく来る入試に向けて、基礎的な四字熟語の知識は確実にしておこう。
- 4 場面のイメージを持っておきたい。桐乃は「隠れるように涙を拭いながら」であり、それに対して里穂(母)は「密やかな声で」「桐乃の頭を一度そつと撫でて」いるのである。
- 5 直後の「小さな船で日本にやってきた」を中心にする。解答らの大きさに合わせて、事情などを付け足したいところである。
- 6 「私は日本が、日本人が怖い」「学校も、ほかの子も、学校の先生も怖い」と言っている子に対して、「日本も、日本人もそれほど悪くないと思うよ。タオがもつと日本に慣れたらさ」という返答するのは、言っていることを否定し、タオ自身が変わるべきだと言っているように受け取れる。
- 7 本文中に直接的に書いてあるのは直後の里穂の発言「答えられるわけがない」以下の部分である。そこを中心に据えつつ、心情を表す表現を考えると、「顔を赤くした」ので「恥ずかしい」や「怒り」などが考えられる。どれかひとつに断定するのも難しい箇所であるが、複合的なのでくわしめに書いておこう。
- 8 字数指定をいったん気にせず単純に問いに答えるならば、直後にある通りである。「タオみたいな目に誰も遭ってほしくない」の部分から切り出すと字数が合わないで、これの言いかえを考える。
- 9 直後に「でも、ほんの少しだけ、少しでいいの、お母さんの時間、私にくないか?」という発言があるので、これまで桐乃に時間を割かず何をやっていたのか考えればいだろう。
- 10 ベランダから見えるものである。最終段にも「桐乃は母の腕のなかから給水塔を見上げた」とある。ちなみにたびたび給水塔に言及されていることにも注目しながら読めるとよい。かつて母(里穂)が幼かった頃からこの団地の象徴のようにそこにあり、タオとの一件の直接的なきっかけともなっている。しかし、同時に給水塔自体はそういった人間の営みとは無関係にただそこにそうしてあり、団地の人々を見守るようでもあり、ときに非情にそこにあるだけでもあるのであった。
- 11 本文の場面だけでも、当初は「集中豪雨みたいな強い雨」だったものが、「霧雨のような細かい雨」になっており、「霏のようなものがかかっていて、全体像が見えない」状態から「霏はもう今にも消えかかっていた」というように、雨に関する表現が多数ちりばめられているとともに、それらが変化の象徴として描かれているのであった。